

12 福王寺の木造阿弥陀如来坐像



指 定 国重要文化財 昭和25年 8 月29日
 所在地 協 和
 所有者 福 王 寺



福王寺阿弥陀如来坐像は、大正3年(1914)8月25日国宝に指定され、昭和25年(1950)8月29日重要文化財として再指定されたもので、信州における中世美術の代表として重要な位置をしめている。

仏像の高さは約1.4mの坐像で、量感から言っても決して小さな感じを受けるものでなく、特に鎌倉初期の作品として、その時代の気風を十分に発揮し、しかも、地方色の強い無骨で素朴な面もあって、優美で繊細な平安時代(794~1184)の作風とは一変して力強い剛健さがうかがわれる。豪快ともいべき肩の張りや幅の広い体軀、眼光射るが如く人を押し、引き締った面容は特に男性的で、信州人の気風を代表するが如くである。なお、その深くきざまれた刀のあとは鎌倉時代の典型的なものであって、阿弥陀如来としての穏和な来迎相とは言い得ない程、豪壮な姿に造られている。

しかし、江戸時代初期の寛永年間山火事によって弥陀堂を初め六坊堂宇が全焼し、辛うじて本尊阿弥陀如来坐像とその他4体の仏像のみが難を逃れて現存している。

往時は雄大であった堂宇も、今はその面影が全くなく、重文阿弥陀如来坐像は、現在の阿弥陀堂を移転したあとに新設した収蔵庫に納められている。

なお、作者については不明であるが、恐らく善光寺仏師であろうと言われている。参考の為に胎内銘を記せば次の通りである。これによると仏像の製作年代は鎌倉初期の建仁3年(1203)のころ僧幸筈があらたに御堂を建て、仏像を造立したとされる。

〔年号不知行西四十五年幸筈禪□〕

御堂建同此佛采色

立給

建長二年大才庚申二月采色

行西玄城切六十二

旦那是」

おなじく像内腰のあたりに、別に下記のような 銘文がしるされている。

〔福王寺本尊一庚申十月十五日〕

福王寺本尊一躰

大檀那沙弥隆幸

大勸進金剛佛師聖賢

絵師善光寺

参河法眼慶□(遍か?)〕